ISSN 0027-9153

月報

国立国会図書館

新たな貴重書のご紹介　第49回貴重書等指定委員会報告
インターネットを活用した古典籍の調査　『山幸（山の幸）』を例に

東日本大震災アーカイブシンポジウム
4年目の震災アーカイブの現状と今後の未来（世界）へ繋ぐために

世界図書館紀行　バンコク

2015.7
No.651

国立国会図書館利用案内

東京本館

所　在　地　〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号　03(3581)2331
利用案内　03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間　月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は 17:00までです。
資料請求受付★　月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。
即日複写受付　月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付★　月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　利用者サービス部　サービス運営課　03(3581)2331　内線25211

関西館

所　在　地　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号　0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、
科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間　月～土曜日 10:00～18:00
資料請求受付★　月～土曜日 10:00～17:15
セルフ複写受付　月～土曜日 10:00～17:30
即日複写受付　月～土曜日 10:00～17:00
後日郵送複写受付★　月～土曜日 10:00～17:45
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　関西館　総務課　0774(98)1224［直通］

国際子ども図書館

所　在　地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話番号　03(3827)2053
利用案内　03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
利用できる人　どなたでも利用できます。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料　国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間　火～日曜日 9:30～17:00　※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。
第一・第二資料室の利用時間　閲覧時間　火～土曜日 9:30～17:00
資料請求受付　火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間　即日複写受付　火～日曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付　火～日曜日 10:00～16:30
複写製品引渡し　火～日曜日 10:30～12:00　13:00～16:30

■見学のお申込み／国立国会図書館　国際子ども図書館　03(3827)2053［代表］

7 July

CONTENTS

02 Kilima-njaro expedition　アフリカ「探検」の時代
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

04 新たな貴重書のご紹介　第49回貴重書等指定委員会報告

11 インターネットを活用した古典籍の調査　『山幸（山の幸）』を例に

16 東日本大震災アーカイブシンポジウム
4年目の震災アーカイブの現状と今後の未来（世界）へ繋ぐために

21 世界図書館紀行　バンコク

26 What's 書誌調整 ふたたび　第1回　はじめに

15 館内スコープ
今日は博物館、明日はお寺　貴重書等指定委員会幹事の仕事

27 本屋にない本
○『連環画研究』
○『トヨタ自動車75年史　もっといいクルマをつくろうよ　1937-2012』

29 TOPIC
○著作権者のご連絡先等が不明な著作者について、情報をお寄せください

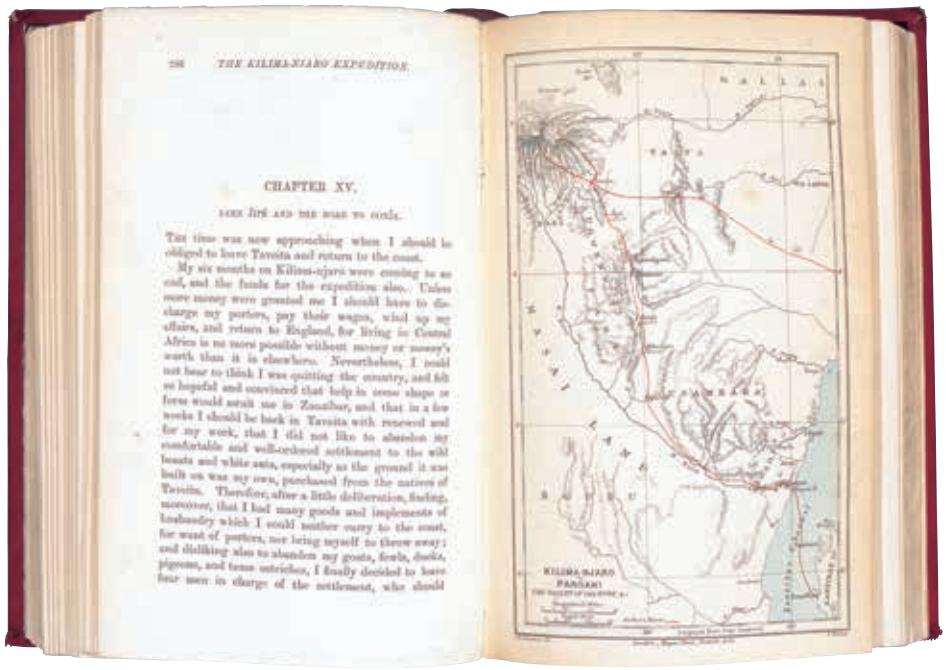
30 お知らせ
○資料のデジタル化に伴い原資料の利用を停止します
○国際子ども図書館所蔵資料の新館書庫への移転作業について
○全国書誌データ・レファレンス協同データベース利活用研修会のご案内
○平成27年度アジア情報研修
○新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物

今月の一冊 July

国立国会図書館の蔵書から

Kilima-njaro expedition　アフリカ「探検」の時代

宇野　亮一



CHAPTER XV.

The Kilima-njaro expedition: a record of scientific exploration in eastern equatorial Africa and a general description of the natural history, languages, and commerce of the Kilima-njaro district / H. H. Johnston.
London: Kegan Paul, Trench, 1886.
xv, 572 p. : ill., maps (some col., some fold.) , port. ; 23cm.
<請求記号　99-126>

Sir Harry Hamilton Johnston（1858-1927）
イギリスの探検家、植物学者、植民地行政官。ニャサランド（現マラウイ）総督などを務めた。なお、アフリカの密林に住む珍獣オカピを西洋に紹介したのも彼であり、オカピの学名は *Okapia johnstoni*である。（肖像は本書口絵より）

本書は、1884年に行われたアフリカ大陸最高峰、キリマンジャロ山の学術調査の記録である。著者のジョンストンは英国王立協会の援助を受け、キリマンジャロ山麓に6か月滞在して動植物の調査、標本採集などを行った。本書の前半は調査行の時系列に沿った描写、後半は動植物や現地の文化、言語などの項目別の記述となっている。資料中の挿図や地図も著者によるものであり、直接アフリカを目にした者の筆になるだけに、伝聞で描かれたものとは異なる正確さと迫力が感じられる。

記録を読んで印象に残るのは、ジョンストンの用意周到で組織立った活動だ。現地で多くの人を雇い、指導者の協力をも取り付けるばかりでなく、あたかも小さな村のような居住地を建設している（図1）。アフリカ人を指揮して畑を開墾し動物を飼育し、交通路を整備する様子は、どこか彼ら西洋人がアフリカで行った植民地化の様子を連想させる。この調査で名をあげた彼が後に植民地行政官となり、「アフリカ分割」に深く関わることとなったのも、あるいは必然であったのだろうか。

一方、現地の言葉を積極的に活用している点は、植民地化とは少し違った印象を受ける。調査団の中では東アフリカの地域共通語（リンガ・フランカ）であるスワヒリ語が使われており、ジョンストンは朝からアフリカ人に「Tayari, Bwana,Tayari! Aya! Kazi, Kazi!」（準備ができたよ、旦那！さあ！仕事、仕事！）と急き立てられている。自分の言葉が通じる気軽さ、指揮命令関係だけではない仲間意識が表れているかのようだ。また、現地の指導者と滞在のための謝礼について交渉するくだりも妙に微笑ましい。「金の卵を産む鵞鳥を絞め殺しても金は手に入らない」とイソップ物語を引くジョンストンに対して、現地の指導者も、

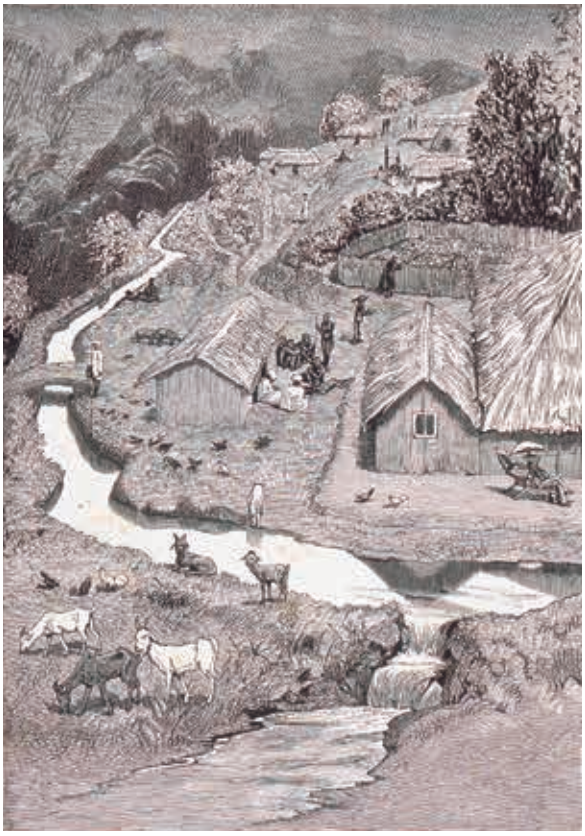


図１　ジョンストンが建設し滞在した居住地

▶ジョンストンが描いた挿図。
上から、捕えられたサル、倉庫、マサイ人の戦士

図２　キリマンジャロの様子

参考：現代のキリマンジャロ（筆者撮影）

「私は、植物が育つまでは強引に伸ばしはしないが、最後まで実をつけないなら切って捨てる」とたとえ話で切り返しているのだ。こうした交渉も、通訳を介さずスワヒリ語で行われているようである。

このように活発な活動を行っていたジョンストンだが、あくまで目的は学術調査ということか、アフリカ大陸最高峰たるキリマンジャロのふもとに滞在しながら、登頂にはさほど関心をもっていないように見える。ドイツ人ハンス・メイヤーらによる初登頂は1889年なので当時山頂付近は未踏であったわけだが、6か月の滞在の間に彼が雪の積もっている高度まで登ったのは2度のみで、それも雪と霧で先に進みづらいとして登頂には挑まず早めに引き返している。もっとも挿図を見ると、当時のキリマンジャロは現代と違ってずいぶんと低いあたりまで雪で覆われているようであり（図2）、現代よりも登山は困難だっただろう。

最後に、この資料の中で図書館について述べた部分を紹介しよう。ジョンストンは初めてキリマンジャロ山麓に辿り着いた際、赤道直下ながら涼しい気候に感動し、そこに大都市が築かれる日を夢想する。その都市では「博物館には私の道具が飾られ、図書館にはこの本が収められる」と、本と自分の未来への希望を表明しているのだ。彼の滞在していた地域は、今ではタンザニア・キリマンジャロ州の州都となっており、確かに図書館もある。ただ、そこに本書が収められているかは定かではない。もちろん当館では閲覧が可能なので、興味を持たれた方はぜひ一読していただきたい。

（うの　りょういち
調査及び立法考査局議会官庁資料課）

○参考文献
Oxford dictionary of national biography : in association with the British Academy : from the earliest times to the year 2000 / edited by H.C.G. Matthew and Brian Harrison. Oxford University Press, 2004.
＜請求記号　GG12-B21＞

新たな貴重書のご紹介

教誡新學比丘行護律儀　1巻

＜請求記号　WA7-285＞
（唐）釋道宣 述
下村生藏　慶長9 [1604]
1冊　大きさ26.7×18.9cm

貴重書

古活字版　版心書名：教誡儀　小口書：教誡律儀　刊記「右教誡儀簡牘磨滅字畫殘殃或烏而焉/或焉而馬故勵志投小財命工令活板併/爲正法久住善願圓滿耳/慶長九年甲辰應鐘上旬/城西歡喜山寶珠院沙門幸朝/下村生藏刊之」　四周双辺　有界　毎半葉9行17字　注小字双行　版心「教誡儀卷（丁付）」　双魚尾　黒口　印記：金合文庫、小林蔵書

巻頭

刊記（最終丁表）

刊記（最終丁裏）

『教誡新學比丘行護律儀』は、初心の仏道修行者が守るべき日常の作法を説いたもので、唐代の律学の大家、道宣（596-667）の著作として尊重されてきました。

本書は、慶長9（1604）年に刊行された古活字版（室町時代末から江戸時代初期に刊行された活字本）で、宝珠院が出版を企画し、下村生蔵が印刷したものです。宝珠院についての詳細は不明ですが、慶長勅版[1]の出版に関与した公卿の舟橋秀賢（1575-1614）の日記には「宝珠院に活字を遣わした」という記事があり、この活字を用いて出版を行っていた京都の寺院であろうと考えられます。

また、下村生蔵は当時の有力な印刷者とみられ、嵯峨本の刊行者とされる角倉素庵（1571-1632）、古活字版による医書の出版を行った曲直瀬玄朔（1549-1631）等の出版事業との関係が注目される人物です。下村生蔵刊の古活字版は数種類が知られていますが、当館所蔵の『元亨釈書』[2]は本書と同種の活字を使用したものといわれており、あわせて下村生蔵刊の古活字版の研究に資することが期待されます。

本書の底本となったのは、文永10（1273）年に京都泉涌寺において刊行された版[3]で、留学僧のもたらした宋版（宋代に出版された本）をもとに製作されたと推定されます。本書の巻末には慶長の刊記のほかに、文永の刊記と南宋・紹興12（1142）年の跋文があり、上記のような出版のいきさつをうかがうことができます。

1　慶長年間に後陽成天皇の勅命によって刊行された古活字版。
2　＜請求記号　WA7-187＞。国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可。
3　慶長の刊記には、泉涌寺版の傷みが激しくなったため、新たに古活字版の刊行を計画したことが述べられています。

国立国会図書館は、蔵書のうち、特に注意して取り扱うべき重要な資料を「貴重書」「準貴重書」と定めています。平成27年2月18日、和漢書5点、洋書1点の計6点を貴重書に、和書1点を準貴重書に指定し、累計で貴重書は1,282点、準貴重書は796点となりました。

新たに貴重書、準貴重書に指定した資料についてご紹介します。（貴重書等指定委員会）

『聚分韻略』は、漢詩を作る際に参考にする韻引き辞書（韻書）です。嘉元4（1306）年に成立しました。約8,000の漢字を上平声・下平声・上声・去声・入声の5巻113韻に分けておさめたもので、南北朝から室町時代にかけて、仏教書以外の著作で最も多く重版されたことでも知られています。著者の虎関師錬（こかんしれん）（1278-1346）は南北朝時代の臨済宗の僧侶で、詩文に長じました。

今回、貴重書に指定された慶長11（1606）年版は、巻5入声のみを独立し、巻1～4の平・上・去の三韻は三段に重ねて巻数を分けない三重韻の形式です。携帯性を重んじて、両手の平に載るほどの小さな本で、指定された本はさらに改装・化粧裁ちされています。江戸時代に広く用いられた小型三重韻本の初期のものとして貴重です。刊行者の醫徳堂守三の詳しい経歴はわかっていませんが、京都の医師で、『醫方考』など古活字版の医書等も出版しています。

当館では、南北朝時代に刊行された最古刊本といわれるもの[4]、文明13（1481）年に薩摩和泉荘で開版（出版）された最古の三重韻本[5]をはじめ、40種以上の各時代の『聚分韻略』を所蔵しています。慶長11年版には訓は付いていませんが、付訓本である慶長17年版[6]は、慶長11年版の重版であるとの説もあり[7]、当館で様々な版種の『聚分韻略』を比較して見られることは意義深いといえるでしょう。

4　＜請求記号　WA6-50＞
5　＜請求記号　WA6-51＞
6　＜請求記号　WA7-176＞。4～6は国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可。
7　川瀬一馬『古辞書の研究』増訂版　雄松堂出版　1986　p.495

聚分韻略（しゅうぶんいんりゃく）　5巻

貴重書

＜請求記号　WA7-286＞
［師錬 著］
［京都］　醫徳堂主守三　慶長11［1606］
1冊　大きさ16.4×13.8cm

三重韻本　書名は35丁表「聚分韻略上平終」、35丁裏「聚分韻略卷之二」、66丁表「聚分韻略下平終 上聲終 去聲終」、66丁裏「聚分韻略卷之五 入聲」、82丁裏「聚分韻略入聲終」による　刊記「慶長丙午重陽日/醫徳堂主守三刊行」　後補白無地表紙　巻頭および巻末の遊び紙に平仄等の書き入れあり　旧請求記号：W57-N19　印記：佐佐藏書

巻1巻頭

巻5巻頭

刊記

[禪林抜類聚（ぜんりんばつるいじゅう）] 4巻

貴重書

<請求記号　WA7-287>
[（元）善俊、智鏡、道泰等 編　闕名 抄録]
[京都]　長嶋世兵衛　元和6 [1620]
4冊　大きさ28.0×21.6cm

古活字版　巻頭書名及び目録題：禪林類聚　版心書名：禪林　大きさは巻1による　巻2：28.0×21.4cm、巻3：28.0×21.5cm、巻4：27.9×21.3cm　四周単辺　郭内23.1×18.8cm　無界　毎半葉12行22字　注小字双行　上下花魚尾　黒口　付訓植版　後補黒色表紙　巻1「七十」丁を欠く　各巻見返しに「四巻之内 松墅山/陽廣寺」の書き入れあり　印記：陽廣寺印

巻1巻頭

巻3「廿五」丁裏の1行目に転倒活字（写真拡大部分）がある

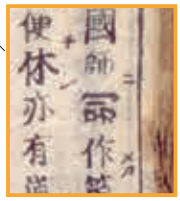
巻4巻末

本書は、禅宗の公案[8]を集め、部門別に分類した書物です。元代の中国で編集された『禪林類聚』20巻20冊を、日本で4巻4冊に抄録したものを『禪林抜類聚』と称しました。『禪林抜類聚』は、江戸時代初めの慶長18（1613）年に京都の高台寺で出版されて以来、古活字版として繰り返し刊行されており、慶長・元和年間版（小林満介版）、元和6（1620）年版（長嶋世兵衛版）、元和・寛永年間版の諸種が知られています。

本書は、元和6年に京都の長嶋世兵衛によって刊行された古活字版です。

本書で注目されるのは、行間に片仮名の小字で振り仮名・送り仮名・助詞などの訓点[9]を付植していることです。小さな訓点を活字で組むことは技術的に困難であったとされ、訓点を付植した古活字版の数は多くありません。また、古活字版としてはめずらしく、出版年、出版地、出版者を明記した刊記を備える点で書誌学的に貴重です。出版者の長嶋世兵衛は、初期の出版書肆の一人とみられますが、為政者や寺院等を中心とした古活字版の出版事業に書肆が参入してくる様相を伝える意味でも、興味深い資料といえます。

伝本はほかに、布施美術館（滋賀県）の所蔵が知られるのみです。

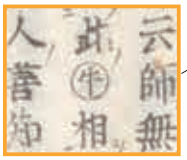


8　禅宗で、参禅者に出す課題。優れた禅僧の言行のうち、修行者にとって意義深いものや、暗示に富むものを選んで課題としたもので、難問が多い。
9　漢文を訓読するために、漢字の上や脇に書き入れる文字や符号。

前書と同じ『禪林抜類聚』巻1、巻4の2冊です。揃いの栗皮色表紙が付されていますが、識語に見られる寺院名や人名が一致しないことや、書き込みの様子が異なることなどから、もとは別々に伝来していたものを、取り合わせたと考えられます。

本書は、元和・寛永年間に刊行された古活字版と推定されます。同種の古活字版は、巻4の巻末に「於洛陽高臺寺」と記されるのが特徴で、伝本には、天理図書館本[10]、宮内庁書陵部本[11]、駒澤大学本（巻3、4のみ）があります。これら3点の伝本はすべて植字を異にしており同版ではありませんが、巻4の丁付「七十二」丁表6-7行目に使用されている特殊な活字（写真拡大部分）が一致するなど、活字の共有がうかがわれ、同一の製作者グループによって刊行されたものと推定されます。

国立国会図書館所蔵本の巻4も、巻末に「於洛陽高臺寺」と記されており、調査の結果、天理図書館本と同版であることを確認しました。一方、巻1については、1丁のみ（丁付「十三」）は天理図書館本と一致しましたが、そのほかの丁については同版の所在を確認できませんでした。しかし、この巻1も、黒口や魚尾の長さ等が、ほかの元和・寛永年間版と共通しており、これらの一種であった可能性が高いと考えられます。



10 川瀬一馬『古活字版之研究』増補版　日本古書籍商協会　1967　p.722によると、本書の異植字版として小汀文庫本があったとされるが、現所在不明。

11 東洋文庫本の巻1も同版。

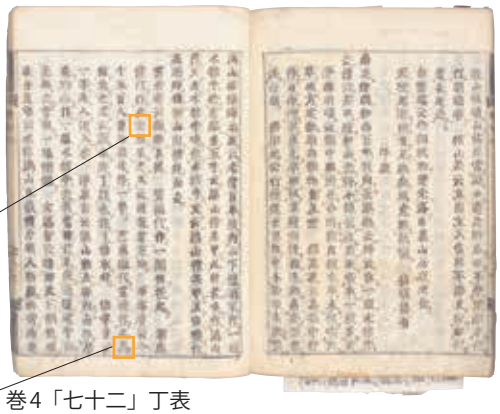
禪林抜類聚　巻1,4

貴重書

<請求記号　WA7-288>
[（元）善俊、智鏡、道泰等 編　闕名 抄録]
[元和・寛永年間]
2冊　大きさ28.0×20.1cm

古活字版　書名は巻1刷り題簽による　巻頭書名：禪林類聚　版心書名：禪林　大きさは巻1による　巻4：28.1×20.0cm　四周単辺　郭内22.8×16.4cm　無界　毎半葉12行22字注小字双行　上下花魚尾　黒口　栗皮色表紙　巻1巻末に「信州瑞松寺之僧 梵洌 九拝」「卍山和尚」「信州」、巻1裏見返しに「従大雪山遺贈 不重代」「玉冊」「恭明」、巻4巻末に「金剛山明音寺什物」「四巻内 丈太□叟」の書き入れあり　印記：不重（巻1巻末）

巻1巻頭



巻4「七十二」丁表

巻4巻末

朱子行状（しゅしぎょうじょう）

貴重書

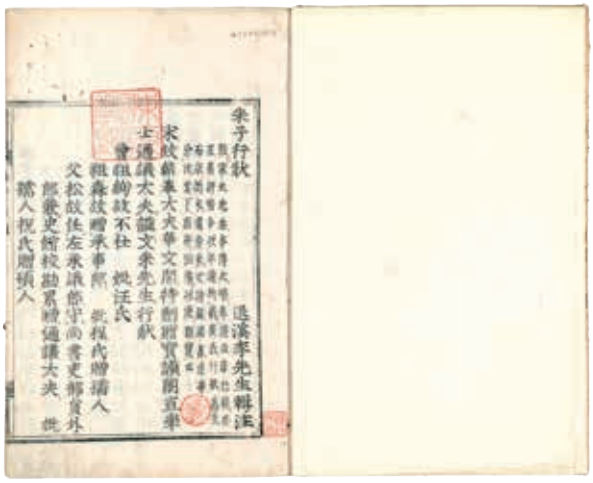
＜請求記号　WA8-19＞
（朝鮮）李滉 輯注
［寛永・正保頃］
1冊　大きさ31.9×21.4cm

古活字版　五針眼訂法　四周双辺　無界　毎半葉10行18字　注小字双行　版心「朱子行状一（～五十五）」　花魚尾　黒口　巻末に「慶安四年辛卯秋七月朔/闇齋柯（花押）（朱印「敬義」）/伊藤勝重剛」と墨書あり　旧請求記号：寄別6-2-3-2　『国立国会図書館所蔵朝鮮関係資料目録 4.朝鮮本篇』所載の請求記号：6232（貴）　印記：讀杜艸堂

『朱子行状』は、朱子学を大成した朱熹（1130-1200）[12]の伝記で、高弟の黄榦（1152-1221）[13]が嘉定14（1221）年に完成させたといわれ、朱熹の官界における経歴を、年代を追って具体的に示すとともに、朱熹の学問、思想、品行、事業等を概説として記載しています。本書は、この『朱子行状』に朝鮮の李滉（1501-1570）[14]の輯註が付されたもので、江戸時代の寛永・正保（1624-1648）頃の刊行と推定される古活字版です。李滉輯註の『朱子行状』は、朝鮮よりもむしろ日本において広く需要があり、江戸時代に何度も版を重ねました。日本において、李滉の註が付された版が普及した理由は、山崎闇斎（1618-1682）[15]の崎門学派等において、李滉を尊崇したことがあげられます。山崎闇斎は、自著『文会筆録』巻17に李滉の輯註について記載していることからも、その崇拝ぶりがうかがわれます。

江戸時代『朱子行状』の各種の版のなかでは最も早い刊行とされるこの古活字版は、現在では内閣文庫と無窮会文庫の所蔵が知られているのみです。

なお、貴重書に指定された本の巻末には、「慶安四年辛卯秋七月朔／闇斎柯（花押）（朱印「敬義」）／伊藤勝重剛」の墨書があります。山崎闇斎の門下に伊藤重剛（名は勝、土佐人）がおり、山崎闇斎は慶安4（1651）年に土佐を訪れていたことがわかっていますが、この墨書の経緯の詳細は不明です。今後の研究が待たれます。



巻頭

巻末墨書

国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可。

12 南宋の徽州（安徽省）の人。
13 南宋の福建の人。号は勉斎。朱熹の女婿。
14 朝鮮李朝の朱子学者。号は退溪。
15 儒者。名は嘉、柯。字は敬義。号は闇斎。

本書は、江戸時代の絵俳書の代表作の一つであり、明和初めの錦絵発生に先行する本格的な木版彩色刷の嚆矢として著名な資料です。石寿観秀国（1711-1796）が編集した江戸座（俳諧流派）諸家の発句に、勝間龍水（1697-1773）が描いた草花・虫類の絵を添えています。

絵俳書とは、絵を主体とする俳書で、明暦2（1656）年の北村季吟『いなご』に始まります。元禄時代にはいったん下火になりますが、享保15（1730）年に刊行された『父の恩』[16]以降、絵俳書や俳諧一枚摺は多色刷りの時代を迎え、浮世絵版画に先行して多色刷りを発達させました。宝暦・明和期には『わかな』（宝暦6（1756）年刊）、『海の幸』[17]（宝暦12（1762）年刊）、本書などの精巧な多色刷りによる絵俳書が刊行されています。

『山幸』の伝本は、上下いずれかのみの本も含め12点（うち2点は当館所蔵）が確認されていますが、現存するほとんどの諸本で版または刷の一部に違いの見られる箇所があり、ほぼ1冊ごとに版面の状態が異なっていることから、諸本を比較することで[18]、木版多色刷りがどのように制作されていたかの研究に資するものと考えられます。なお、今回準貴重書に指定された本は、特に残存数の少ない刷りの図（右下図。p.13もご覧ください。）を含んでいますが、同様の図を含む伝本はほかに1点しか確認されていません。国内で所蔵するのは当館のみであり、大変稀少な資料といえます。

16 ＜請求記号　WA9-8＞。国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可。
17 ＜請求記号　WB1-22＞、＜請求記号　197-121＞。前者は下巻のみで『山の幸』下巻と合綴。
18「インターネットを活用した古典籍の調査」（pp. 11-14）参照。

山幸（やまのさち）　2巻

準貴重書

＜請求記号　WB1-23＞
[石寿観秀国 編　勝間龍水 画]
明和2 [1765] 序
2冊（分3冊）　大きさ25.8×18.7cm

書名は序題による　色刷　袋綴　四つ目綴じ　四周単辺　郭内23.3-23.8×17.0cm　版心 上：「〇一（-〇廿一）」、中：「〇廿二（-〇廿六）・（2丁丁付欠）・△三（-△十一）」、下：「△十二（-△廿六）」（以下欠）　上下巻の2冊本を改装して3冊としたもの　刊記を含む4丁半を欠く（△二・廿七-廿九欠、△七ウは白紙）

「〇廿五」丁表

「△七」丁裏・「△八」丁表

貴重書

ブレーズ・ド・ヴィジュネル『暗号論』（1587）

<請求記号　WA42-99>

Vigenère, Blaise de, 1523-1596. Traicte' Des Chiffres, ou secretes manieres d'escrire / Par Blaise de Vigenere, Bourbonnois. A Paris : Chez Abel L'Angelier, M.D.LXXXVII. [1587] 354 leaves : illustrations ; 24cm（4to）
Second issue, with 1587 imprint.
Signatures: A-Z⁴ 2A-2Z⁴ [*]² 3A-3B⁴ [**]² 3C⁴ 3D²（3D2+1.2）3E-3Q⁴ 3R² 3S1 3T² 3V1 3X-3Z⁴ 4A-4N⁴ 4（italic）O-4（italic）P⁴ 4（italic）Q² 4O-4R⁴ 4S² ä² 3D2（2）=3D3（Versos of 2Z4 and 4（italic）Q2 are blank）.

標題紙

図表（fol. 50v）

ひらがなの文字見本

『暗号論』は、フランスの外交官ブレーズ・ド・ヴィジュネル（1523-1596）が完成させ、後に「ヴィジュネル暗号」の名で知られるようになる多表式の換字式暗号を発表した作品です。多表式の換字式暗号とは、複数の暗号アルファベット表を用いて平文[19]を暗号化する方法で、古くから使用されてきた単一換字式暗号[20]よりも複雑な暗号書記法として考案されました。19世紀半ばまで解読不可能と考えられていた、非常に有名な暗号です。

『暗号論』の初版は、1586年にパリの出版書籍商アベル・ランジュリエ（1553頃-1610）[21]により出版されました。本書は翌1587年に刊行された初版二刷です。赤・黒二色刷りで、多くの図表を収録した精巧な作りが特徴です。後半で、ヴィジュネルは古今東西のさまざまなアルファベットについて記述していますが、本書には「中国と日本のアルファベット」として漢字とひらがなの文字見本[22]が収録されています。当時のヨーロッパにおける日本への関心の高さがうかがえる、貴重な資料です。

19 暗号化する前の文字列のこと。
20 ひとつの暗号アルファベット表を用いて平文を暗号化する方法。解読方法の研究が進み、当時、安全性が不確かとなっていた。
21 パリ高等法院の大広間に店を構える出版書籍商。モンテーニュの『エセー』1595年版の出版で知られる。旧約聖書からとった“アベルの供犠”をプリンターズマークとして使用し、本書の標題紙にもそのひとつが見てとれる。
22 初刷刊行後に補遺として印刷されたため、当初、初刷には収録されていなかったとみられる。

インターネットを活用した古典籍の調査
『山幸（山の幸）』を例に

国立国会図書館では、収蔵資料のうち、現在まで伝わっている本（伝本）が少なく、歴史、社会、文化等を研究する上で特に重要であるとみなされる資料を貴重書・準貴重書等（以下、「貴重書等」）に指定して[1]、文化財として永く保存し後世に伝えるために、保存と利用の両面において他の資料とは違う特別な扱いをしています。

資料を貴重書等に指定するにあたっては、その資料の価値を事前に十分調査する必要があるため、貴重書等候補資料ごとに担当者（幹事）をわりふり、ほかの所蔵機関の諸本（同一の作品で、改変や誤記などによって異なる箇所のある写本・刊本の総称）を調査するといった準備作業を行います。その調査結果をもとに貴重書等指定委員会で審議を行い、貴重書等に指定するのが妥当かどうかを検討するのです。

平成26年度に新たに貴重書等に指定した資料は本号（pp.4～10）で紹介していますが、ここでは準貴重書に指定された『山幸』（『山の幸』と表記されることも）を例に、幹事が準備段階でどのような調査を行っているのか、その一端をご紹介します。

伝本を探す

準備作業の第一歩は伝本の所在確認です。1冊でも多くの伝本を調査できれば、候補資料の特性もそれだけよく把握できます。たとえば、書物文化史上重要な資料であっても、諸本の比較によって候補資料が明らかに時代の下る「後刷り」であることが確認されれば、貴重書には指定しないという判断もありえます。そのため、諸本を可能な限り調査する作業は欠かせません。

当館では、今回準貴重書に指定されたもの以外に『山の幸』をもう1点所蔵しており[2]、それは平成23年度に準貴重書に指定されています。その際の調査では、当館所蔵資料以外に国内で5点の所在が確認できました（東北大学附属図書館（狩野文庫）、東京大学附属図書館（知十文庫）、東京藝術大学附属図書館のほか、個人蔵など2点）。

このほか、『国書総目録』第7巻（補訂版 岩波書店 1990）によれば、明和2年（1765）版を相見香雨（あいみこうう）と村野時哉が、安永7年（1778）版を延岡内藤家（1747年から1871年まで延岡藩主）が、それぞれ所蔵しているとのことですが、平成23年度の時点では、これら3点の所在は不明でした。

幸い、『山幸』の諸本のうち、東北大学、東京藝術大学所蔵本はデジタル化され、画像が公開されています。また、東京大学所蔵本はマイクロフィッシュ（白黒）が刊行されており[3]、大まかな内容はこれらで調査することが可能です。

これらの調査は引き続き行うこととして、気になるのは『国書総目録』に記載がありながら所在のわからない3点です。戦災等で失われてしまったことも考えられますが、所蔵者が変わって現存している可能性もあります。また、この3点以外にも、これまで所在の確認されていなかった資料が存在するかもしれません。

新たな伝本を発見

そこで、まず、相見香雨旧蔵書を収めた「相見文庫」がある九州大学附属図書館のデータベースを検索しました。「相見文庫」には平成23年度調査時に問い合わせ、蔵書の中に『山幸』は含まれていないという回答を得ていました。

ところが、データベースを検索すると、なんと『山幸』がヒットしたではありませんか！ただし、コレクション名は「相見文庫」ではなく「雅俗（がぞく）文庫」となっています。九州大学附属図書館のホームページによると、雅俗文庫は「本学名誉教授中野三敏氏（1935-）が蒐集した江戸期和装本を中心とするコレクション」とのこと。これはどうやら、中野氏が所蔵していた本のようです。この資料はデジタル化などはされていないようなので、さっそく九州大学附属図書館に閲覧が可能かどうかを問い合わせ、後日、無事に調査させていただくことができました。

相見旧蔵書は意外なところに

次は伝存不明、またはこれまで所蔵を確認できていない『山幸』を探してみます。

現在は多くの図書館や博物館が所蔵資料の目録やデータベースをインターネットで公開していますので、冊子体の蔵書目録を1冊ずつ調査していた時代から考えれば、他機関の所蔵調査は比較的容易になりました。とはいえ、数多ある図書館や博物館のデータベースを個別に検索していては漏れも多く、時間もかかりますので、まずは検索エンジンを使います。「山幸」「山の幸」「勝間龍水」といったキーワードのほか、日本語以外のウェブサイトに情報がある可能性も考え、「Yamanosachi」「Yama and sachi」「Katsuma Ryosui」などでも検索すると、画像を含めて非常に多くの結果がヒットしました（余談ですが、画像検索の結果には少なからぬ数のオークションサイトの出品データが含まれていました。今回調査できた以外にも、個人の所蔵する本などが存在する可能性をうかがわせます。）。

検索結果の中から、図書館や博物館、研究機関らしきもののウェブサイトを確認していったところ、海外の所蔵機関がいくつか見つかりました。そのうちの一つ、ゲティ研究所[4]の所蔵資料はデジタル画像が公開されており、そこに相見香雨の蔵書印があったのです！所在不明だった本のうち、相見香雨旧蔵書の行方が判明しました。

また、検索エンジンに頼るだけではなく、図書館員としての経験と勘をはたらかせて、目録類に記載された参考文献を調査したり、「大英博物館で所蔵しているならフランス国立図書館は？」などと考えてピンポイントで検索したりすることを繰り返し、最終的には海外の所蔵機関を6か所確認できました。ゲティ研究所のほか、ニューヨーク公共図書館（スペンサーコレクション）、ボストン美術館（デンマン・ウォルド・ロスコレクション）、大英博物館（ジャック・ヒリアー旧蔵）、フランス国立図書館、オスロ大学人文社会学図書館（上巻のみ）です。

残念ながら、『国書総目録』に記載された諸本のうち、村野時哉旧蔵書と延岡内藤家蔵書については所在を明らかにすることはできませんでしたが、『国書総目録』に記載のない資料の所在をこれだけ突き止めることができたのも、インターネットのおかげといえるかもしれません[5]。今回の調査を開始する前は当館所蔵を含めて6点しか確認できていなかった伝本は、12点に倍増しました。

インターネット時代の諸本調査

伝本の所在確認でインターネットのありがたみを実感しましたが、準備作業でそれ以上に助けとなったのは、資料デジタル化の進展で、資料の内容をパソコンから見ることができたことです。国内の所蔵機関とゲティ研究所所蔵資料のデジタル化の状況はすでに記したとおりですが、それ以外の諸本もフランス国立図書館[6]、ニューヨーク公共図書館以外はデジタル画像が公開されており、日本国内にいながらにして内容の調

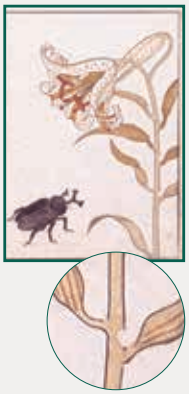
『山幸』諸本の比較（例）

今回準貴重書に指定された本（指定本）と、東北大学附属図書館（狩野文庫）所蔵本、既に国立国会図書館で所蔵していた本（平成23年度指定本）[2]とを比較します。

「○十三」丁裏

茎の根元にむかごのある版とない版とがあり、指定本にはむかごがある。むかごのない版は、むかごのあった部分に不自然な描線・彩色の空白がある（なお、かぶとむしの上の蝶々は後代の書き込みとみられる。）。

指定本　　狩野文庫



「○廿五」丁表

へびいちごの実の地色が赤い版と白っぽい版とがある。指定本は白っぽい。

指定本　　狩野文庫

「○廿五」丁裏

こうもり・きゅうりの色調が、それぞれ灰色・緑、茶色・黄色になっている2種類の版がある。指定本は灰色・緑。

指定本　　狩野文庫

「△五」丁表

栖礎の発句の後に和鶴の発句が記される版と、空白になっている版とがあり、指定本は後者と考えられる（和鶴の次の栖洲の発句は、破損により失われたと推測される。）。

指定本　　平成 23 年度指定本

「△七」丁裏・「△八」丁表

指定本は「△七」丁裏が白紙である。また、「△八」丁表は、玉虫の下に葉のある版とない版とがある。現時点で確認できた限りでは、「△七」丁裏の白紙の丁と「△八」丁表の玉虫が葉の上に乗っている図を持つのは、指定本のほかはボストン美術館所蔵本のみであり、国内では指定本が唯一のもの。

指定本　　平成 23 年度指定本

「△十」丁表

指定本は、ほおずきの実と袋がいずれも赤茶色だが、実が真っ赤で袋が灰色、実が茶色で袋が灰色など、色調の異なる版が数種ある。

指定本　　平成 23 年度指定本

■東北大学デジタルコレクション狩野文庫データベースでご覧いただけます　http://dbr.library.tohoku.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000002kano
■国立国会図書館デジタルコレクションでご覧いただけます　http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542740

査が可能でした。もちろん、色調の細かい差異などの調査に限界はありますが、資料の状態、欠丁の有無、図版や大幅な彩色の違いなどは十分確認できます。以前であれば、所蔵が確認できても「イギリスか…、出張は無理だな…。」と諦めていたであろう諸本調査が可能になったことで、貴重書等指定の準備作業の精度が大幅に向上したことはいうまでもありません。

新たな疑問も

インターネットのデジタル画像調査と、国内所蔵機関（東京大学附属図書館、九州大学附属図書館）の原本調査の結果、これまで指摘されていなかった興味深い事実が判明しました。『山幸』は、現存するほとんどの諸本で版または刷の一部に違いの見られる箇所があり、ほぼ1冊ごとに版面の状態が異なっていたのです（前頁参照）。特に下巻は、内容を確認できたすべての現存諸本が異なった刷りの様相を呈していました。内容を確認できたものはすべて、全体の配列と刊記は一致していましたが、版面から刷りの先後を判断することは難しく、また、1冊の中でも、刷りの早い丁と後から刷られた丁が混在している可能性も考えられることから、単純に諸本を、先に刷られて造本されたものと、後に刷られて造本されたものとに分類することはできないようです。

『山幸』は、いったいどのような手順で制作されたのでしょうか？これは「研究」の領域に踏み込んだ課題であり、貴重書等指定の準備作業ではそこまで深く追究はしませんが、今後、諸本を比較することで、木版多色刷りがどのように制作されていたかについて、研究が進むことが期待されます。

この調査ですべての諸本がいわば「違うもの」であると確認できたことは、候補資料が準貴重書に指定される上で重要なポイントとなりました。また、この本は特に残存数の少ない刷りの図を含んでおり、同様の図を含む伝本は国内にはなく、稀少であることもわかりました。

今回の準備作業では、インターネットの普及と世界的なデジタル化の潮流のメリットを十二分に享受できましたが、これが10年前、20年前だったらどうだったでしょうか。伝本調査は蔵書目録を丹念に見ていくことである程度は可能だったかもしれませんが、海外所在の諸本調査は困難だったと思われます。伝本がそれなりに多く、さらに候補資料の特徴の把握が十分でない、ということになれば、準貴重書指定は躊躇されたかもしれません。いま、このタイミングで調査できたからこそ準貴重書に指定できたともいえます。

このように、今回の調査では世界の図書館・博物館で進められている資料デジタル化の成果を活用し、貴重書等の指定に生かすことができました。当館でも所蔵資料のデジタル化を順次進めています。私たちの知らないところで、世界の人が、さまざまな目的で当館のデジタル化資料を役立ててくれているかもしれない…、そんな期待に満ちた予感を得た調査でもありました。

（利用者サービス部人文課　伊藤　りさ）

1「国立国会図書館貴重書指定基準」（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws/pdf/a4116.pdf）、「国立国会図書館準貴重書等指定基準」（http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/laws/pdf/a4117.pdf）に基づきます。
2 下巻のみ。『海の幸』下巻と合綴。＜請求記号　WB1-22＞ http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542740
3『東京大学総合図書館所蔵洒竹・竹冷・知十文庫連歌俳諧書』（マイクロフィッシュ）＜請求記号　YD5-11＞
4 Getty Research Institute。ロサンゼルスにある美術研究機関。アメリカの大富豪、ジャン・ポール・ゲティ（1892-1976）の遺産をもとに設立されたゲティセンターの一組織で、センターにはゲティ研究所のほか、ジャン・ポール・ゲティ美術館、修復研究所、ゲティ助成プログラム等の組織があります。
5 今回、オンラインカタログではなく冊子目録で所蔵を確認したのは、文献情報からたどっていったニューヨーク公共図書館のみでした。
6 フランス国立図書館所蔵本については、同館日本資料担当司書のヴェロニク・ベランジェ氏から多大のご援助をいただき、部分的に内容の調査を行いました。ここに記して感謝します。

今日は博物館、明日はお寺　貴重書等指定委員会幹事の仕事

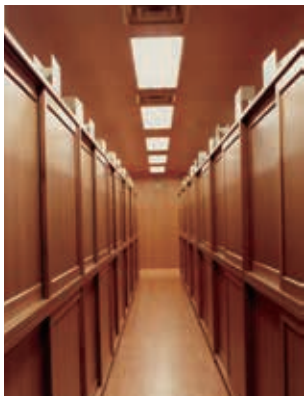
今号には「新たな貴重書のご紹介」という記事があり（pp.4～10）、「インターネットを活用した古典籍の調査」という記事もありますので（pp.11～14）、古典籍係員を主とした貴重書等指定委員会幹事の仕事の一端を知っていただくことができたと思います。ここではさらにこぼれ話を…。

「インターネットを活用した古典籍の調査」では、インターネット上の目録データ、画像データを使うことで調査が大きく進展した例をご紹介しました。自分の席にいながらにして調べたい資料の画像が見られる！という、とっても便利な世の中になってはいますが、もちろん、実際に見せていただくという従来どおりのアナログな方法も健在です。

確認したい資料の所蔵機関が図書館であれば、閲覧へのプロセスは比較的単純です。ただし、たいていは貴重資料として取り扱われていますので、事前の予約をし、必要な場合は紹介状を用意しなければなりません。博物館や美術館で浮世絵や彩色刷り絵本を見せていただく場合、図書館のような閲覧室はありません。わざわざ会議室を準備してくださり、貴重な資料を手に取って拝見させていただけたのは嬉しい思い出です。また、仏書の多くは寺院で所蔵していますが、これらは一般に公開されていません。ドキドキしながらお電話をし、所蔵を確認し、見せていただけるか交渉する、ということもしばしば。戦前の文献では、そのお寺にあると書いてあったのに、今は所在不明になっている！という悲しいお返事を聞くことも。

こうした調査を重ねて指定された貴重書・準貴重書の目録データや画像データが公開されると、幹事は晴れ舞台に上がる子どもの姿を見る親のような気持ちにもなります。当館の所蔵資料はすべて国民の文化的財産ですが、中でも貴重書・準貴重書は、先人が脈々と伝えて来た文化遺産の精華といえます。調査自体は、1丁1丁異同を確かめるなど、地味で根気のいる仕事ですが、数百年の時を経て伝えられた資料を、長期の保存に適した環境でさらに未来へと伝え、利用していただくことができる…それを励みに、コツコツと続けているのです。

（人文課古典籍係　しまねこや）



貴重書・準貴重書の安住の地、貴重書書庫

東日本大震災アーカイブシンポジウム

4年目の震災アーカイブの現状と今後の未来（世界）へ繋ぐために

基調講演

国立国会図書館と東北大学災害科学国際研究所は、平成27年1月11日に、東北大学青葉山キャンパス災害科学国際研究所棟1階多目的ホールにおいて、「東日本大震災アーカイブシンポジウム —4年目の震災アーカイブの現状と今後の未来（世界）へ繋ぐために」を開催しました。シンポジウムには約140名が参加しました。

当館と同研究所は、平成25年4月に東日本大震災に関する記録・教訓等の収集・保存・調査研究・公開に関する包括的な相互協力協定を締結しています。同協定により共催するシンポジウムは、昨年に続き、今回で2回目となります。本稿ではシンポジウムの概略をご紹介します。

＊シンポジウムの動画やプレゼンテーション資料は国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」でご覧になれます。

基調講演

杉本重雄氏（筑波大学図書館情報メディア系教授・図書館情報メディア研究科研究科長）
「ディジタルアーカイブへの期待－時を超えてコミュニティをつなぐ」

この講演は、筑波大学の研究室からシンポジウム会場へ、Skype（スカイプ）を利用した中継により行われました。

基調講演のテーマは、災害の記憶と記録を将来に残す仕組みとしてのディジタルアーカイブについて、その利用性、価値を高めるためには、どうすればよいかというものでした。

ディジタルアーカイブを継続する

はじめに、「ディジタルアーカイブ」とは「いろいろなリソースをディジタル形式で収集、組織化し、長期にわたって提供するサービス、システム」であると改めて定義した上で、特に「長期にわたって」

提供、利用されることに意義があると指摘されました。

杉本氏は、東日本大震災を経験して、形あるものは簡単に失われることを改めて知り、残すべきものをディジタルアーカイブする重要性を強く感じたといいます。また、災害の記録をアーカイブすることも、災害規模や原因に関わりなく重要であると指摘します。なぜなら、災害もその地域コミュニティの歴史の一部であり、記録を残すことでコミュニティの記憶を保つことが可能になるからです。

また、ディジタルアーカイブの重要な役割は、コンテンツ利用により新たな「知」が創られ社会へ還元されることであり、そのためには、長期にわたってディジタルアーカイブを継続すること、また利用されることが必要だとしました。

コミュニティ指向の鍵はメタデータ

コンテンツが利用されるためには、メタデータの存在が非常に重要です。メタデータには、タイトルや作成者名、作成日付などの一般的な情報（書誌的情報）と、アノテーション等、その他の情報があります。書誌的情報は、国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」の例に見られるように、アーカイブ間の横断的な検索に役立ちます。一方アノテーションとは、コメントやレビューのような、利用者が新たに付加する、コンテンツの中身について記述する情報を意味します。杉本氏は、コメントに関するコメントなど、あるコンテンツに対するアノテーションの蓄積が進むと、その蓄積自体がコンテンツそのものと同様の価値を持つようになると指摘しました。

ディジタルアーカイブは、研究機関、行政・実務機関、教育機関から一般の方まで、多くの方にさまざまな目的で利用されます。一般的な書誌的情報はコミュニティ間の共通ニーズに応えるものですが、それだけだとコンテンツ提供者の視点のみとなってしまう危険性があります。それを避けるためにも、それぞれの利用者コミュニティに存在する異なる特性とニーズを調査し、利用目的にあった「メタデータ」を作成していくことが課題となっているとのことでした。

また、ディジタルアーカイブを用いて新たなコンテンツを創るために、地域のコンテンツの価値をよく知る地域の図書館や博物館が、連携してディジタルアーカイブ利用推進の場になることへの期待が述べられました。

最後に杉本氏は、コンテンツを「使って」、「創り」、何かを「伝え」、そして「つながる」という、４つの「つ」で始まることばが大事であると述べ、講演は終了しました。

事例報告

続いて国内の８機関から事例報告が行われました。

宮城県図書館（熊谷慎一郎氏　司書）「東日本大震災とデジタルアーカイブ－宮城県の取組から」

宮城県図書館は、県内33自治体と連携して、東日本大震災の記録や関係資料を収集･デジタル化し、インターネット上に公開する「宮城県震災アーカイブ（仮称）」の構築にむけた取り組みを行っています。何を震災資料とみなすかに自治体間で違いがあること、人的資源がそもそも少ないことが課題として挙げられました。また、収集した資料を、災害伝承、復興計画策定、復興支援などで利用する場合、利用者がその都度許諾を得る必要のないよう、原権利者から許諾を得るようにしているとの説明がありました。

多賀城市（千葉まち子氏　総務部地域コミュニティ課副主幹）「未来への減災メッセージ～「たがじょう見聞憶」が伝えたいこと～」

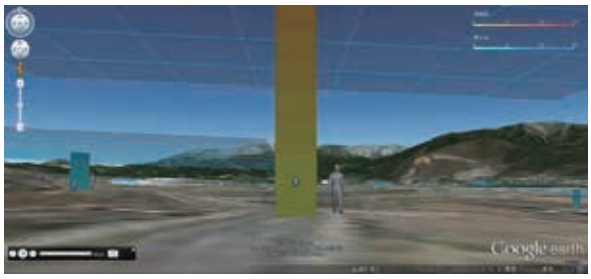
デジタルアーカイブ「たがじょう見聞憶」では、180人以上の関係者にインタビューし、「防災減災への指針一人一話」という証言集をまとめ収録したことや、アーカイブの利用促進のため、平成27年1月から市の広報誌「広報多賀城」に「たがじょう見聞憶」との連動記事掲載を始めたことなどが紹介されました。千葉氏は、アーカイブの意義とは、資料の散逸を防ぎ、災害の記録や記憶を収集することに尽きるかもしれないが、ただ集めて残すだけではなく、次に起こりうる災害に備えて、困難を生き抜くための知恵や防災・減災のヒントを知るために活用される「人を助ける仕組み」としてのアーカイブでありたいと述べました。

日本赤十字社（志波一顕氏　赤十字原子力災害情報センター参事）「赤十字原子力災害情報センターデジタルアーカイブ」

赤十字原子力災害情報センターは、東日本大震災の発生にともない福島県で展開した救護活動を通じて得た、原子力災害に関する情報、データ、教訓等を収集・蓄積し、今後の災害対策に必要な情報を内外に発信することを目的に設置されました。志波氏は、具体的活動として、原子力災害における赤十字活動ガイドラインの策定・普及と、原子力災害に関するデジタルアーカイブの充実を挙げました。コンテンツの収集にあたっては、赤十字のもつ「中立」の原則に従い、原子力発電の是非ではなく、減災のための知識など原子力災害対応に資する内容となるよう留意していると説明がありました。

東北大学災害科学国際研究所（柴山明寛氏　准教授）「みちのく震録伝の3年間のあゆみと今後の展望について」

震災アーカイブ「みちのく震録伝」では、120機関の協力を得て活動を行っています。収集した資料のうち、約12万点の資料をウェブ公開し、約35万点の資料が非公開であることが報告されました。また、震災記録をわかりやすく可視化したコンテンツの作成や、震災を伝える展示物の作成支援や震災ワークショップに取り組んでいるとの紹介がありました。



「ヒトの目に映る3.11津波浸水」

東松島市図書館（加藤孔敬氏　副館長）「東松島市の取組み事例」

東松島市図書館では、収集した震災資料を用いた防災教育補助教材（45分DVD）の製作や、観光ボランティアが被災地を案内する際に活用できるように、震災時の写真や動画、体験談を実装したiPadを貸し出すなど、利活用の取り組みを行っています。

「まちなか震災アーカイブ」という活動では、公共施設や商店等の協力事業者の事業所にQRコードを印字したステッカーやパンフレットを設置し、携帯端末から容易に東松島市の震災記録へアクセスできるようにしていることが紹介されました。

NPO法人20世紀アーカイブ仙台（佐藤正実氏　副理事）「市民ひとりひとりがセンサーになる震災アーカイブ」

最初に「市民ひとりひとりがセンサーになる」という「市民センサー」という考えは、小松左京氏が著書『小松左京の大震災 '95』（毎日新聞社、1996.6）の前書きで、大手メディア、研究機関、自治体だけのアーカイブでは不十分なので、発災から１か月間の市民生活を市民一人一人がアーカイブしてほしいという考えを述べたことから来ていると説明がありました。市民センサーを活用した市民アーカイブを実践し、継続するためには、市民・生活感覚を未来に伝えるアーカイブを提案すること、そして今すぐ自分たちが使えるアーカイブを企画することの２つの大きなテーマがあるとしました。

せんだいメディアテーク（北野央氏　企画・活動支援室 主事）「震災アーカイブの生涯学習施設的利活用」

せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」では、震災の記録の利活用として、ウェブサイトの運営、展示イベントや市民が記録した映像の上映会開催、さらにはその映像の一部をDVD化し、貸し出していることが報告され、利活用の場を通して記録を循環させ育てるサイクルが重要であると述べられました。また震災について思い起こし、それらを記録として残すための場づくりとして、「はじまりのごはん―いつ、どこで、なにたべた？―」と題し、震災直後の食にまつわる写真を展示し、来場者にエピソードや感想を書いてもらう展示会が紹介されました。北野氏は、今年４月には震災当時２才の子どもが小学校に入学することから、今から次の世代に何をどのように伝えるかを地域で考えていかないといけないと述べました。

「はじまりのごはん」

国立国会図書館（諏訪康子　電子情報部主任司書）「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」」

国立国会図書館からは、「ひなぎく」に関連する活動について報告しました。平成26年度に、「ひなぎく」は地方自治体が運営するアーカイブと新たに連携を開始しました。またNPOやボランティア団体を対象とした震災関連書類等の整理保存の講習会を開催したことや、「国立国会図書館と大学図書館との連絡会」のもとで、大学における東日本大震災にかかわる記録活動についてアンケート調査を行い、報告書を作成し公開した*ことなどを報告しました。

*国立国会図書館と大学図書館との連絡会・東日本大震災被災図書館記録ワーキング・グループ最終報告書：事実の記録から、心の記録へ http://kn.ndl.go.jp/20830212-d942-4d57-bd85-2844d2ca6d49

会場の様子

パネルディスカッション

「4年目の震災アーカイブの現状と今後の未来（世界）へ繋ぐために」

東北大学災害科学国際研究所柴山明寛准教授の進行のもと、会場からの質問に対して、各パネリストが回答する形式で、事例報告者7名により行われました。まとめとして、「今後の未来へ繋ぐために」をテーマとした意見を、パネリストがそれぞれ発言し終了しました。主な質疑は以下のとおりです。

○東日本大震災のことを後世に伝える、長く伝える、国内外に伝えるためにはどのような取り組みを行えばよいか？

→継続的に活動を続けること、様々な利用法を提案し多くの人に使ってもらってその意見を反映するというサイクルが重要である。海外へは、英語で発信するのが効果的である。

○震災アーカイブにおける著作権処理についてどう考えるか？

→二次利用を進めるためにはあらかじめコンテンツ提供者から許諾を得る必要があるが、誰にもわかりやすい許諾書を作成することはなかなか難しい。二次利用は、コンテンツ提供者に社会的意義を認識してもらう良い機会となる。

パネルディスカッションの様子

○被災していない地域の人達との連携や協力をどう考えているか？

→友好都市などの関係性を持つということが重要である。また、人に伝えていくということでは、アーティストなどと連携し、震災の記録をテーマとした芸術作品を通して伝えていくことも有効である。

附　国連防災世界会議

国立国会図書館は、第3回国連防災世界会議パブリック・フォーラムに参加し、平成27年3月14日（土）から3月18日（水）まで、「ひなぎく」を紹介するためのブース展示をせんだいメディアテークで、ポスター展示を東京エレクトロンホール宮城で行いました。また、国連防災世界会議のために、日本語に加え、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語、アラビア語、中国語、朝鮮語の計9か国語のパンフレットを用意しました。パンフレットは、「ひなぎく」（http://kn.ndl.go.jp/）でもご覧になれます。

（電子情報部電子情報流通課）

イベントのお知らせ

東日本大震災に関する書類・写真・動画の整理・保存講習会 ～被災支援活動の経験・ノウハウを活かすために～

東日本大震災の被災地等における支援活動を行うボランティア団体職員などを対象にした、アーカイブの専門家による保存講習会を開催します。

（開催概要）

平成27年7月27日（月）13:30 - 17:00
仙台市情報・産業プラザ セミナールーム

イベントの詳細、申込み方法は、NDLホームページ、または「ひなぎく」のお知らせをご覧ください。
http://kn.ndl.go.jp/information/380

世界図書館紀行

バンコク

森田 理恵子

バンコクは、1782年にラーマ1世がチャオプラヤー川の対岸から遷都して以来、タイの政治・経済・文化の中心地となっている。

現在、人口約830万人を誇るバンコクは、タイ最大の都市であり、東南アジアでも有数の大都市である。サイアムからチットロム周辺には巨大なショッピングモールが建ち並び、若者文化の中心地となっている。一方、プラナコーン区の王宮周辺には壮大な仏教寺院が並び、観光客で賑わっている。仏教寺院とはいえ、わびさびを感じさせる日本の寺院とは異なり、タイの寺院は非常に色鮮やかである。タイで最も格式が高いとされる、エメラルドの仏像が本尊のワット・プラケオ、巨大な涅槃像で有名なワット・ポー（写真1）など、いずれも眩い金色が目を引く華やかな寺院だ。

バンコクは交通網の拡充が進んでおり、中心地では地下鉄（バンコク・メトロ）と高架鉄道（バンコク・スカイトレイン）（写真2）が整備されている。その一方で、トゥクトゥクと呼ばれる昔ながらの三輪バイクタクシー（写真3）や、乗り合いバスが今も市民の足として重宝されている。観光地では客引きのトゥクトゥクが列をなしているが、値段交渉のできない観光客は現地の人の数倍支払う羽目になることが多いらしい。

タイは熱帯性気候の国であり、バンコクにおいて、いちばん暑い4月の平均気温は35℃、いちばん涼しい12月でも平均気温は17℃となる。11月～2月の乾期、3月～5月の暑期、6月～10月の雨期に分かれ、雨期には洪水が起こることもある。2011年に起こった大洪水は記憶に新しい。首都バンコクも甚大な被害を被っており、図書館とて例外ではない。のちほど、タマサート大学図書館の取り組みとともに、その洪水被害についても紹介したい。

Thailand Knowledge Park（TKパーク）

バンコクを訪れた観光客の多くが訪れるであろう市街の中心地、チットロム。バンコク・スカイトレインのチットロム駅から直結する巨大な複合モールが、セントラルワールドプラザだ。この施設には、伊勢丹やZENなどのデパートのほか、ホテルや映画館、レストランなどがあり、ここだけで1日過ごせる規模となっている。

このセントラルワールドプラザの最上階に、国立の図書館である「Thailand Knowledge Park」、通称TKパークが入っている。このような一等地にあるTKパークとはどのような場所なのか。

2003年、当時のタクシン内閣が国民に読書習慣を定着させるために、児童や若年層の読書推進と、多様な分野で出版が活性化することを目指して、TKパークの創設を決めた。そして内閣府下にある「知識管理開発事務所」（Office of Knowledge Management and Development）のもとにTKパーク事務所を設置し、2005年、TKパークが開館したのである。

TKパークは会員制の図書館で、会費は、25歳未満と60歳以上のタイ人は年間100バーツ、25歳から60歳未満のタイ人は年間200バーツ、外国人は年齢にかかわらず年間400バーツである。また、ワンデイパスもあり、そちらは20バーツで手に入る（加えて、50バーツのデポジットが必要）。1バーツは2015年4月末で約3.6円なので、外国人が1日TKパークを見学しようと思えば約72円ということになる。有料であっても、その立地とこれから紹介する魅力的な空間・コンテンツゆえに大盛況で、週末には読書スペースを確保するのも難しいほどの人気らしい。

セントラルワールドプラザの7階の一端に、8階にあるTKパーク専用のエスカレーターがある（写真4）。エスカレーターを昇ると、TKパークの受付と入退館ゲートが現れる（写真5）。この受付で身分証明証を提示し、先述の入館料を支払うと、入館のためのICカードをもらえる仕組みだ。

ゲートを抜けた先は開放的な空間になっていた。各スペースを隔てる壁も基本的にはガラス張りで、明るい雰囲気で開放感にあふれている。明るい白の壁や柱と、温かみを感じる木の床、そして差し色として使われる快活な印象の赤で、館全体が統一されている（写真6）。全体として可愛らしい印象はあるが、それでいてうるさすぎず、なんとなく、そこにいるだけで楽しい気分になるようなスペースだ。開放感あふれるのは建物のせいだけでなく、TKパークはクワイエットルームと呼ばれるスペースを除いて、基本的には会話可能となっている。そこここで気軽に意見を交換しながら本を読んでいる人たちは、実に楽しそうだ。

TKパークはいくつかのスペースに分けられており、クワイエットルーム以外にもリーディングパーク、ITライブラリやミュージッ

4

5

6

クライブラリなどがある。中でも印象的だったのは、創造性を刺激するためのマインドルームと呼ばれる部屋と、児童向け読書スペースだ。

マインドルームはTKパークを入ってすぐ、オープンスペースの脇にある（写真7）。個人での購入が難しい高価な図鑑や資料集、写真集、画集などが集められた部屋だ。建築、舞台芸術、ファッション、映画や音楽など、創造性を必要とする活動について学びたい人や、実際に創作活動をしたい人のための、情報の収集と意見交換のためのスペースとなっている。TKパークは全体として若者の読書推進という目的があるが、利用対象を若者だけに絞っているわけではない。それゆえに、創作活動を学ぶ学生だけでなく、実際に創作活動を行うプロも集まり、ともに勉強し、互いに刺激しあうことができる空間となっているわけだ。

児童向け読書スペースは、子どもたちが読書に集中できるよう配慮がなされたスペースとなっている。子どもが自分の世界に集中するためには狭いパーソナルスペースが必要だという考えのもと、TKパークは子どもたち一人一人に「自分の城」を与える工夫を行っている。中でも人気はハニカムラダーで、名前のとおりの蜂の巣構造の梯子は、書架の高いところにある本を取るための梯子としての機能だけでなく、読書スペースとしての機能を兼ねている（写真8）。また、ツリーハウスと呼ばれる円筒形の読書スペースも用意している（写真9）。いずれも大人の目から見ても魅力的だが、これらは残念ながら子ども専用で、大人が上ることは許されていない。しかしながら、大人のための読書スペースもなかなかどうして居心地の良さそうなものであった。靴を脱いであがった先で、柔らかいビーズクッション製の一人用ソファーが待っている（写真10）。訪問時は平日の昼間であったが、数人がくつろいだ様子で読書に耽っていた。

TKパークを訪問した日は幸運にも、ドイツから招いた専門家による、図書館関係者向けの講演会が開催されていた。そこで急遽、講演会を聴講させてもらった。演題は「Libraries as learning space --and as a place, where everyone likes to be」で、訳すなら「学習空間としての図書館―そして誰もがそこにいたくなる、場所としての図書館」といったところだろうか。良い図書館空間であるために必要な10の条件について、実例を交えて解説された。このようにして筆者は、図書館という場所の作り方、あり方について、実際にTKパークを見て学んだ上に、さらに座学の形でも学ぶ機会を得たのである。

7

8

9

10

タマサート大学
プリディ・パノムヨン図書館

タマサート大学は、1934年に設立されたタイの伝統校である。1917年に設立されたチュラロンコーン大学に続いて2番目に古く、現在もこの2校がタイ国内で双璧を成す名門大学となっている。創設者であるプリディ・パノムヨン博士は、後に首相まで務めた政治家であり、タマサート大学も、当初は法学と政治学を中心とする単科大学として始まった。現在では、医学部や経済学部など複数の学部を持つ総合大学となっている。

タマサート大学の附属図書館は、11の分館からなる。この11の分館全体で、図書116万冊、雑誌3,700タイトルの蔵書を持つ。電子図書館サービスの拡充にも積極的で、電子ジャーナル15,000タイトル以上、電子新聞3,000タイトル以上を含む、97のオンラインデータベースが利用可能となっているほか、館独自のデータベースも構築している。これらの電子資料を全て集めたのが、ポータルサイト「Thammasat University Digital Collections」で、そこにあるデータベースのひとつに、先述の2011年の大洪水に関する資料を集めた「The 2011 Flood at TU」がある。タマサート大学ランシットキャンパスは、もともと浸水しやすい場所にあるそうで、それまでにも幾度か床から50cm程度のところまで浸水することがあったらしい。その対応策として、ランシットキャンパスにある図書館の資料は、床から80cm以上の位置に排架されていた。ところが、2011年の大洪水では、床上1m70cmまで浸水した上、なかなか水が引かなかったため、資料は約45日間もの間、水に浸かった状態となってしまった。そのため、修復も不可能となり、6万冊近い蔵書が廃棄された。このような甚大な被害を出した大洪水について、タマサート大学はその状況を記録して、後世に継承し、今後の洪水対策に活かすことを目指して、データベースを構築している。当時の新聞や文書類はもちろんのこと、洪水を報じたニュース映像などもアーカイブしている。なお、デジタル資料に関しては、タマサート大学での洪水被害に関するものだけを収集しているが、紙媒体の資料については、2011年の大洪水に関するすべてのタイ語資料を収集している。

11

12

13

そして今回筆者が訪問したのは、11の分館の中心で、大学創設者の名前を冠するプリディ・パノムヨン図書館だ（写真11）。キャンパス中心部近くの便利な場所にあり、図書館の入退館ゲートが建物の地下にある。見学してみると、この図書館は、利用者である学生の使いやすさ、居心地の良さを意識してつくられた図書館であることがわかった。

地下に降りるとすぐ、ゲートの手前にインフォメーションカウンターとレファレンスカウンターがあり、それぞれ一人ずつ職員が座っている（写真12、13）。そこを抜けると色

鮮やかな雑誌架が並び、その前には電源を備えた机が設置されていた（写真14）。続いて書庫に降りると、床に資料案内の導線が描かれていた（写真15）。広大な書庫で目的の資料を見つけるのは、慣れていてもなかなか難しい。このような細やかな心配りが、利便性を向上させているのだと感じた。

館内には展示や特集コーナーが多く、プリディ・パノムヨン博士に関する資料が集められた展示コーナー（写真16）のほか、東南アジアとASEANについての資料が集められたコーナー（写真17）、コレクションの寄贈者に関するコーナー（写真18）、音楽コレクションに関するコーナー（写真19）、パキスタンコーナー（写真20）など、本来の調べものや勉強の息抜きについ立ち寄りたくなるようなコーナーがたくさんあった。ちなみに「パキスタンコーナー」には唐突な印象を持ったが、このコーナーでは定期的に近隣の一国を取り上げているようで、以前は「インドコーナー」だったそうだ。また、映像資料コーナーでは「Video on Demand」というサービスを提供しており、学生は映画やドキュメンタリー番組、ドラマなどを見ることができる。筆者が訪問した際も、映画鑑賞中の学生が複数おり、そのうち一組は日本のアニメ映画を見ていた。

◆ ◆ ◆

筆者のバンコク訪問中、突発的な豪雨に見舞われることがあった。話には聞いていたので、折り畳み傘を持ち歩いていたのだが、何の役にも立たない。まさにバケツをひっくり返したような降り方だ。あれではどこかの軒先に逃げ込んでやむのを待つしかないだろう。

その逃げ込んだ先が図書館なら、雨宿りのことも忘れて、充実した時間を過ごせるだろうと思う。バンコクを訪問する際には、事前に図書館の場所を調べておくのもよいかもしれない。

（もりた　りえこ　関西館アジア情報課）

14

15

16

17

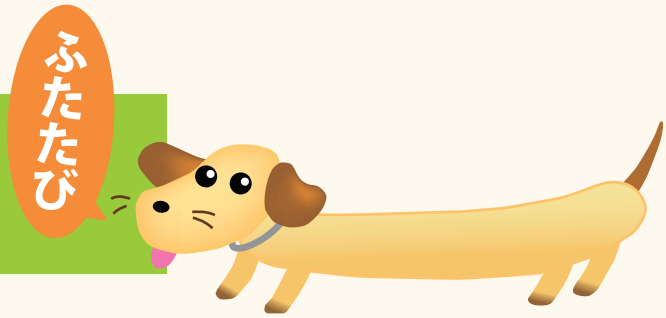
18

19

20

What's 書誌調整

第１回　はじめに



こんにちワン！

ぼく、カーネ（CANE）っていいます。“Cane”はイタリア語で「犬」の意味だから、もし日本語だったらワンちゃん、みたいな名前かな？イタリア語の名前と言っても、イタリア生まれの恋多き男（オス）……ではありません。図書館にとってだいじなことば、「書誌調整[1]（Bibliographic Control）」と「書誌データ[2]へのアクセス（Access）」、そして“Newsletter“から文字を組み合わせた名前です。“Newsletter“は、国立国会図書館（NDL）の収集書誌部がホームページ上で刊行している広報誌『NDL書誌情報ニュースレター』[3]のこと。ぼくは、その広報犬なんです[4]。えっへん！

今まで、『NDL書誌情報ニュースレター』の中で広報をがんばってきたけど、今日は、思い切って飛び出してきました。というのも、今こそぜひ『国立国会図書館月報』の読者に、「書誌調整」について知ってほしいからなんです！

なぜ「今こそ」かって？　よくぞ聞いてくれました。平成15年5月から2年間、「What's 書誌調整」という全12回の連載記事が『月報』に掲載されました[5]。この連載は、難しい概念や用語が多い「書誌調整」について、日本と海外のいろんな動きも織り込みながら、図書館のしごとをしたことのない読者にもわかりやすいよう、やさしく解説したものでした。

ちょうど10年前の平成17年に連載は終わったけれど、その後10年の間も、図書館と「書誌調整」をめぐる状況はどんどん動いています。例えばNDLでは、書誌データや典拠データ[6]をウェブ上でもっともっと活用してもらうためには、どんな形で提供したら便利かなって考え、その成果をホームページで公開するなど[7]、ウェブ時代に適したサービスをがんばってるんですよ。

さらに、図書館の目録[8]を作るための規則そのものも、インターネット全盛のこの時代に合わせて大きく変わろうとしています。「目録規則の改訂」は、今もっとも注目してほしい動きです。

そしてもう一つ、知ってほしいことがあります。それは、「書誌調整」が目指すものも、その中でNDLが果たすべき役割も、その本質は決して変わっていないということ。これまでもこれからも、いちばん優先すべきは「使う人にとって便利である」ということ。とても当たり前の、だからこそとっても大事なことなんです。状況の変化に対応しながらも本質は見失わないように、常に「使う人にとって便利な」サービスを追求する図書館を、ぼくもせいいっぱい広報するんだワン！

目録規則って何？ということは、次回じっくりお話しますね。そのことも含めて、「書誌調整」の今――前の連載終了から10年後の「今」――について、何回かにわたって紹介していきます。これからも時々『月報』にぼくが登場するので、どうぞお見知りおきを♪

たまに『NDL書誌情報ニュースレター』も見に来てくれると、うれしいワン！

（収集書誌部国内資料課　清水　悦子）

1 書誌コントロールともいう。利用者が図書館資料に、より到達しやすくするために、どんな目録を作成・提供すべきか考え、その仕組みをつくりあげること。
2 1つずつの図書館資料を区別するために必要なデータ（図書ならタイトル、著者名、出版地、出版者、出版年、ページ数など）。
3 NDLの書誌データの作成と提供に関するニュースやトピックを、まとめてお知らせするニュースレター。年4回刊行。http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/bib_newsletter/index.html
4 図書館には長〜い歴史があるということと、読者の皆さんと末永〜くお付き合いできたらいいな、という願いも込めて、胴の長〜いダックスフントが広報犬に選ばれました。
5 ホームページでご覧いただけます。http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/whats.html
6 書誌データ検索の手がかりとなる著者名等のアクセスポイントについて、統一的な形式を定めるための拠りどころ。
7 ウェブ上で活用しやすい、コンピュータが処理しやすいデータについては、「使う・つなげる：国立国会図書館のLODを使う」をご覧ください。http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/standards/lod_download.html
8 図書館が所蔵する資料について記録したもの。以前は冊子（本）やカードの形をとっていたが、現在はOPACとして提供されるのが一般的。

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、
日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない
国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

連環画研究

武田雅哉ほか 編　連環画研究会 刊
第1号　2012.3　111p　26cm　＜請求記号　KC486-J317＞
第2号　2013.3　87p　26cm　＜請求記号　KC486-L28＞
第3号　2014.3　157p　26cm　＜請求記号　KC486-L86＞
第4号　2015.2　202p　26cm　＜請求記号　KC486-L171＞

中国では、日本の漫画が多数翻訳されており、雑誌の日本漫画特集も売れ行き好評とのことである。では逆に、日本人は中国の漫画に注目しているのだろうか。本書は、中国の漫画ともいえる「連環画」を題材とした、日本で初めての論文集である。

連環画は、一般的に大きさは手のひらサイズ、1ページに1コマの絵と短い解説文が添えられた本で、中華民国期、1920年代に誕生した。題材は古典小説や、知識や政策の普及を目的とするものなど、時代によって様々である。

本書では、連環画研究会に所属する研究者などが、連環画について多様なテーマで論じている。以下、いくつかの論文を紹介したい。

武田雅哉「龍梅と玉栄の姉妹が読まされたもの―『草原英雄小姐妹』連環画の諸相」（第1号）では、羊飼いの姉妹が、吹雪の中で羊たちを守った実話を元にした連環画を取り上げる。この話は、アニメや人形劇、日本語や英語の絵本の形でも親しまれ、連環画だけでも複数の版が存在する。著者は、物語の中で姉妹が読んでいる本に注目し、文革時期には『毛主席語録』、外国語版では書名が省かれているなど、社会情勢や対象読者に応じて絵の細部にも変化が見られることを示す。

また、田村容子「〈婚活〉する乙女たち―新「婚姻法」時代の連環画」（第2号）では、「婚姻法」が施行された1950年代の作品を取り上げる。親の決めた相手との結婚を否定し、結婚相手には金持ちよりも勤勉な労働者を求め、時には未来の舅姑の人柄をチェックするなど、行動的なヒロインの姿に注目している。

これらを読んで強く感じられることは、連環画自体の面白さはもちろんのこと、各著者が、連環画を独自の視点で切り取り、遊び心満載で論じた内容の面白さである。豊富な図版も読者の理解を助ける。上で紹介したもの以外にも、瀧下彩子「戦場のStar System―李凡夫の抗日戦争漫画」（第3号）、中根研一「連環画の中の雪男2―雪男版スパイ大作戦」（第4号）などは、タイトルを見るだけで興味をそそられるのではないだろうか。

連環画の魅力を文字だけで説明するのは難しいことだが、最近では、京都国際マンガミュージアムで、本書の編者である武田雅哉氏が監修する展示会「知られざる中国〈連環画〉～これも「マンガ」？～」が開催された。また、中野徹「国立国会図書館関西館〈上海新華書店旧蔵書〉の連環画」（第2号）にあるとおり、関西館でも連環画を約4,000タイトル所蔵している。興味をお持ちの方は、ぜひ実物に触れてみていただきたい。思いがけない魅力を発見できるだろう。

（関西館アジア情報課　水流添（つるぞえ）　真紀（まき））

※入手に関するお問い合わせ先
連環画研究会　電子メール　zhu8jie@plum.ocn.ne.jp

トヨタ自動車75年史
もっといいクルマをつくろうよ　1937-2012

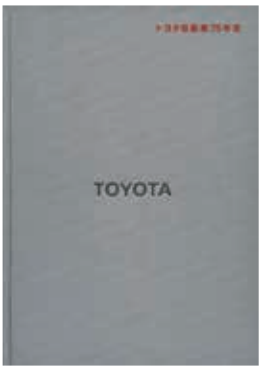
トヨタ自動車 刊
2013.3　516p　27cm　　＜請求記号　DH22-L69＞

その昔、家族で使っていたクルマを憶えていますか？誰でもクルマにまつわる思い出をお持ちではないでしょうか。本書は、そんな思い出をトヨタという自動車メーカーの歴史を通じて振り返ることができる社史です。

クルマは、私たちの暮らしや文化に密接する道具であり、日本の歴史とともに歩んできた工業製品です。本書でも、時代ごとにオイルショックや円高などの新聞記事が、クルマの写真とともに挿入されています。かつて家族で所有していたセダンや憧れだったスポーツカーの写真を見つけると、忘れかけていた思い出とともに当時の光景がよみがえることでしょう。

同時に本書は、日本経済を牽引する企業であるトヨタを分析するための基礎資料でもあります。本書からは大衆車メーカーとしてのトヨタの特徴が見えてきます。価値ある車両を選ぶ社内表彰では、社長賞として、タクシーや教習車など業務用として多く使われている「コンフォート」が選ばれたことがありました。高級車やスポーツカーばかりではなく、人々の生活に深く浸透した道具としてのトヨタ車の本質がうかがえるエピソードです。

社史は、企業の歴史を通じて商品や企業活動を知ることができるものですが、一般の人にとっては身近な存在とはいえません。たいてい限定品で部数は少なく、関係者で共有するにとどまり、広く市販されるものではないからです。しかし、本書は一般の人にとって、ぐっと身近な社史となっています。トヨタのホームページでWeb版が公開されているからです*。冊子版では本編516頁、資料編195頁＜請求記号　DH22-L70＞の厚くて重い社史も、いつどこからでも手軽に閲覧することができるのです。



さらに、このWeb版ではデジタルコンテンツの強みを生かした新しい取り組みがされています。資料編に掲載されている「車両系統図」です。これは、創業期から現在に至るトヨタ車のモデルチェンジの変遷、統廃合の経緯が一目で分かる優れモノです。クリックするとそのクルマが大きく浮かび上がり、解説や当時のリリース資料を閲覧できる仕掛けになっています。また、年代別やボディ形式別の検索機能も付いており、簡便な旧車カタログとしても楽しめる作りになっているのです。なお、この車両系統図の作成には、トヨタ博物館ライブラリーが収集・整理した自動車カタログコレクションの成果が反映されています。

情報公開の流れにも沿って、社史をWeb公開する企業は増えてきています。今後は、動画やCGをはじめ、新しいデジタル技術を用いた社史も増えていくことでしょう。

（電子情報部システム基盤課　安田（やすだ）　隆昭（たかあき））

* https://www.toyota.co.jp/jpn/company/history/75years/

著作権者のご連絡先等が不明な著作者について、情報をお寄せください

国立国会図書館では、資料をインターネット公開するために、著作者/著作権者に関する公開調査を実施しています。

国立国会図書館では、昭和43年までに受け入れた戦前期・戦後期刊行図書、議会資料、法令資料および児童書のうち約90万点をデジタル化しており、このうち約35万点の画像を「国立国会図書館デジタルコレクション」（http://dl.ndl.go.jp/）のサイトにおいてインターネット上で公開しています。

公開にあたっては、著作権者の連絡先を調査し、著作権の確認を行っています。これらが確認できない著作物については、著作権法第67条に基づく文化庁長官の裁定を受けて公開しています。

このたび、過去に文化庁長官裁定を受けてインターネット公開しているものについて、平成27年度および28年度に裁定期間が終了するのに伴い、公開を継続するために、現在も生没年や著作権者の連絡先がわからない著作者約5万名について、ホームページ上で「著作者情報公開調査」を行っています。

皆様からの情報をお待ちしております。

調査対象

主に戦前期までに出版された資料で、著作権保護期間中、または著作権状況が不明の著作物（著作者約5万名、著作物約8万タイトル）

調査後の著作権処理

調査の結果、著作者の没年等が判明し保護期間満了が確認できた著作物については、「国立国会図書館デジタルコレクション」でインターネット公開を継続します。

その他の著作物について、著作権者の連絡先が判明した場合は、その著作物をインターネット公開するための許諾を依頼し、著作権者の連絡先が判明しなかった場合は、その著作物を「国立国会図書館デジタルコレクション」でインターネット公開するための文化庁長官の裁定手続きを行います。

「著作者情報公開調査」

https://openinq.dl.ndl.go.jp/search

生没年、連絡先がわからない著作者と、その著作物へのリンクが一覧になっています。著者に関する情報がありましたら、著作者情報提供フォームから情報をお寄せください。

問い合わせ先　関西館電子図書館課 著作権処理係　電話 0774-98-1352（直通）　電子メール ml-chosakuken@ndl.go.jp

文化庁長官の裁定とは

著作権法では、著作権者が不明等の場合における著作物の利用について、以下のように定められています。

第六十七条　公表された著作物又は相当期間にわたり公衆に提供され、若しくは提示されている事実が明らかである著作物は、著作権者の不明その他の理由により相当な努力を払つてもその著作権者と連絡することができない場合として政令で定める場合は、文化庁長官の裁定を受け、かつ、通常の使用料の額に相当するものとして文化庁長官が定める額の補償金を著作権者のために供託して、その裁定に係る利用方法により利用することができる。　（著作権法 昭和45年5月6日法律第48号）

今回実施する公開調査を含む、さまざまな調査を経てもなお著作権者と連絡が取れない場合に、文化庁長官が著作権者に代わって許諾を与えることにより、インターネットを通じた提供などの利用が可能となります。

資料のデジタル化に伴い原資料の利用を停止します

国立国会図書館では劣化した資料の保存と利用の両立を図るため、デジタル化による媒体変換を行い、作業が終了した後は、原資料に代えてデジタル化資料を提供しています。

このデジタル化作業のため、東京本館で一部の資料の利用を停止します。

詳細については、国立国会図書館ホームページや館内掲示等で随時お知らせいたします。

利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、国民の文化的資産である国立国会図書館の蔵書を、可能な限り長く保存し後世に伝えるため、ご理解とご協力をお願いいたします。

○利用停止対象資料

(1)東京本館所蔵の昭和62年末までに整理された和図書の一部　約45,000冊

・請求記号が以下で始まるものの一部

026～921、AZ-1311～AZ-1792、EG77、GC、M91、M93、ME

・請求記号がULまたはUPで始まる当館刊行物の一部

(2)請求記号がY111、Y121で始まる官庁等が発行する小冊子の一部　約2,100冊

(3)請求記号がY95、Y111、Y991で始まる原子炉設置（変更）許可申請書　約2,200冊

(4)国内刊行学会誌・紀要類の一部（和雑誌・洋雑誌）　約90タイトル

うち洋雑誌7タイトルは関西館所管

(5)国・地方公共団体の各種報告書類（「白書」類も含む）の一部（和図書・和雑誌）　約70タイトル

(6)国の機関が発行する公報の一部　9タイトル

○利用停止期間

平成27年7月中旬から平成28年4月末まで（予定）

※ご来館の際は、NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）で、ご希望の資料が利用可能かどうかを事前にご確認ください。

URL　https://ndlopac.ndl.go.jp/

国際子ども図書館所蔵資料の新館書庫への移転作業について

国際子ども図書館新館（アーチ棟）の完成後、レンガ棟（現在の建物）からアーチ棟書庫への資料の移転作業を以下のとおり実施します。

○移転対象資料

昭和43年以降に受入した和児童書の一部	約16万冊
洋・アジアの児童書の一部	約8万5千冊
和洋児童雑誌、アジアの児童雑誌および関連雑誌の一部	約8万冊
教科書、教師用指導書、学習参考書、非図書資料の一部	約2万5千冊

○移転作業期間　9月1日（火）～10月上旬（予定）

○サービスへの影響

- 8月30日（日）～9月16日（水）は、第一・第二資料室を休室します。
- 児童書研究資料室が開室する9月17日（木）以降は、当日移転作業中の資料について、館内利用を休止します。作業対象資料と作業期間の詳細については、館内に掲示します。
- 遠隔サービスは、提供までの時間が通常よりもかかる場合がありますので、余裕をもってお申し込みください。
- 移転作業中もNDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）上では「利用可」と表示されますので、ご来館の際は、ご利用になりたい資料が利用可能かどうかを事前に電話で確認されることをおすすめします。

利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

○問合せ先

国際子ども図書館　資料情報課

電話　03（3827）2053（代表）（火～日　9:30～17:00）

全国書誌データ・レファレンス協同データベース利活用研修会のご案内

国立国会図書館は、公共図書館、学校図書館等の職員を対象に、全国書誌データ・レファレンス協同データベース利活用研修会を開催します。この研修会は、前年度まで個別に開催していた説明会を初めて合同で実施するもので、当館が提供している全国書誌データをご利用いただくための具体的な方法と、レファレンス協同データベース事業の概要や事業に参加する利点をまとめて知ることができます。また、全国書誌データを用いたリスト作成や、レファレンス協同データベースへのデータ登録等を体験していただくワークショップを予定しています。

○関西館会場

日時：7月24日（金）13:00～17:00（12:30～受付開始）

会場：国立国会図書館関西館　1階第1研修室

申込締切：7月17日（金）

○東京本館会場

日時：8月21日（金）13:00～17:00（12:30～受付開始）

会場：国立国会図書館東京本館　新館3階研修室

申込締切：8月14日（金）

内容の詳細および申込方法は、次のレファレンス協同データベース事業説明会のページをご覧ください。

http://crd.ndl.go.jp/jp/library/guidance_02.html

○問合せ先

国立国会図書館 関西館 図書館協力課 協力ネットワーク係

電話　0774（98）1475　FAX　0774（94）9117　電子メール　info-crd@ndl.go.jp

■ 平成27年度 アジア情報研修

アジア情報の収集・提供に関するスキル向上を図るとともに、当館とアジア情報関係機関との連携を深めることを目的として、平成27年度アジア情報研修を行います。今年度は、日本貿易振興機構アジア経済研究所との共催により実施します。

○日　　時　9月17日（木）～18日（金）

○会　　場　**日本貿易振興機構アジア経済研究所**（千葉市美浜区若葉3-2-2）

＊例年と会場が異なりますのでご注意ください。

○対　　象　各種図書館、調査研究機関、中央省庁・地方公共団体の職員等のうち、初級程度の中国語能力と情報検索の基礎知識を持つ方。

○定　　員　20名（原則、1機関につき1名）。応募多数の場合は調整します。

○テ ー マ　中国と東南アジア諸国の政府情報を調べる

○内容(予定)　**＊受講者には、事前課題をご提出いただきます。**

9月17日（木）13:30-18:00

実習①　中国の政府情報を調べる（当館関西館アジア情報課）

中国法令情報の調査－中国の障害者法制の研究を例として－（アジア経済研究所）

アジア経済研究所図書館見学（同上）

交流会（会費制、希望者のみ）

9月18日（金）9:30-12:00

実習②　東南アジア諸国の人口統計を調べる－華僑・華人を中心に－（アジア経済研究所）

○参 加 費　無料。ただし旅費・滞在費等は参加者の負担とします。

○申込方法　電子メールまたはFAXでお申し込みください。タイトル・件名欄に「アジア情報研修申込み」と記載し、本文に次の事項を明記してください。①氏名（ふりがな）、②所属機関・所在地、③所属部署・職名、④電話番号（日中のご連絡先）、⑤電子メールアドレス（又はFAX番号）、⑥交流会参加の有無

＊申込受付後にお送りする確認メールが届かない場合は、下記問合せ先までお電話でご連絡ください。

○申込期限　8月15日（土）　定員を超えた時点で受付を終了します。

＊参加の可否は、8月21日（金）までにお知らせします。

○申込み・問合せ先　国立国会図書館 関西館 アジア情報課

電子メール k-azia@ndl.go.jp　FAX　0774（94）9115

電話　0774（98）1371（直通）

新刊案内

国立国会図書館の編集・刊行物

レファレンス　772号　A4　62頁　月刊　1,000円（税別）　発売　日本図書館協会

富裕税をめぐる欧州の動向

アメリカ連邦議会議員選挙制度―中間選挙をめぐる課題―

国交正常化から50年の日韓関係―歴史・領土・安全保障問題を中心に―

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話　03（3523）0812

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No.651 7 July 2015

CONTENTS

02 <Book of the month - from NDL collections>
Kilimanjaro expedition: The African "exploration" age

04 Materials recently designated as rare books
49th committee on designation of rare books

11 Utilizing the Internet to search for manuscripts of early Japanese books:
using documents relating to "Yama no sachi" as an example

16 Symposium on the Great East Japan Earthquake Archive FY2014:
Current status of the Great East Japan Earthquake Archive in its fourth year, and actions for the future

21 Travel writing on world libraries: Bangkok

26 What's bibliographic control? revisited (1) Introduction

15 <Tidbits of information on NDL>
Today a museum, tomorrow a temple
Job of the manager of the committee on the designation of rare books

27 <Books not commercially available>
○*Renkanga kenkyū*
○*Toyota jidōsha 75 nenshi: Motto ī kuruma o tsukurōyo: 1937-2012*

29 TOPIC
○Call for information on authors whose copyright holders are unreachable

30 <Announcement>
○Discontinuance of original materials reader service because of digitization
○Transfer of the materials held by the International Library of Children's Literature to the stacks of the new building
○Training Program on the National Bibliographic Data and the Collaborative Reference Database
○Training program on Asian information FY2015
○Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 小寺正一

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成27年7月号（No.651）
平成27年7月1日発行

印刷所 株式会社 正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用

『百々世草　第1巻』から
神坂雪佳 著　山田芸艸堂　明治42（1909）年
1冊　31cm
「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます
（モノクロ画像）
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/849782/20

国立国会図書館月報

平成27年7月1日発行（毎月1回1日発行 7月号通巻651号）

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。